

木簡学会編

『木簡研究』創刊号

長岡京木簡と太政官厨家 今泉隆雄
藤原宮跡出土の官奴婢関係木簡について

鬼頭清明

記念講演 (M・ローウェ) 要旨

木簡第一号発見のころ 田中 琢

彙報

本誌『木簡研究』は、木簡学会がその目的とする所、即ち「木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資する」(木簡学会会則第三条) ために行なう事業の一環として刊行されたものである。

まず創刊号の構成を示せば次の如くである。

創刊の辞

岸 俊男

一九七八年出土の木簡(概要、奈良・平城宮跡他全国二〇遺跡)

一九七七年以前出土の木簡(一)(三重・柳井遺跡、秋田・弘田柵跡、奈良・平城宮跡、正倉院伝世の木簡)

中国簡牘研究の現状

大庭 脩

東北地方出土の木簡について 平川 南

右の如き本誌の構成が、先に引用した木簡学会設立の目的を如実に反映した編集となっていることは一目瞭然であろう。

さて、本誌全般にわたっては、既に平野邦雄氏によって紹介がなされている『日本歴史』三八二号、一九八〇・三(三) ことでもあり、ここでは本誌の中で「第二部の論考篇」を構成する大庭・平川・鬼頭・今泉諸氏の論文に触れることで、本誌紹介の責を全うすることとした。

まず大庭論文は、中国に於ける竹簡・木簡研究の發展史を年代的に三時期に区分し各時期の特色を要約的に述べたものである。氏は序説に於いて第一期(一九四二年以前)・第二期(一九四三年から一九七一年迄)・第三期(一九七三年以降今日を含む時期)と区分されながら、一方本論中では第一期・第三期の時期区分は序説と一致するものの

第二期を一九四三年から一九七九年の間の研究とされており、序説と本論とに於いて第二期の扱いに齟齬を生じていることが気懸りである。ただ、本論を読む限り、第二期は居延漢簡に関する今日迄の研究であり、一方第三期は敦煌・居延等フィールドの遺跡出土の簡牘とは区別される古墓から出土する簡牘について述べられており、そこでは単なる時期区分の問題ではなく、出土遺跡の性格の相違をも考慮に入れた整理が行なわれているのではあるが。

なお、氏が「釈文を作成する極く限られた人たちが、自己の価値判断によって資料の一部を発表しないのは科学的ではない。すべてが公開されてから価値判断を下すべきもので、いざればすべてが公開されるであろうという信頼のもとに、釈読に従事する人びとがその仕事を完成するまで新資料を独占することが認められている」と述べておられる点は、中国のみに限らず日本の発掘調査担当者・木簡釈読担当者も肝に銘ずべき戒めの言葉となろう。

次いで平川論文は、現時点迄に東北地方の各遺跡より出土した木簡についてその個々の内容や文獻史料及び東北地方以外

の遺跡から出土した木簡の記載等と比較しながら述べ、その後、東北地方出土の木簡全般がもつ特色を出土状況・形状・内容とその意義の三点についてまとめられ、更に近年多賀城跡より出土した多量の漆紙文書との関連から地方に於ける木簡と紙の關係解明を通じて木簡の地方に於ける用途を解明することが今後の研究課題であるとされている。今後各地方からの木簡出土例の増加が予測される中で、氏が課題とされた点は、古代に於ける中央と地方の在り方の相違を木簡という史料の上で認識すべきことを提言されたものといえよう。

以上二論文は、従来の研究・発掘調査の状況を現時点で両氏の専門である中国及び東北地方について総括したものである。一方以下に触れる二論文は、「木簡そのものについての研究」である。

今泉論文は、長岡京跡第13次調査出土木簡についてその出土状況・内容とその他の特徴・伴出遺物及び木簡の筆蹟の問題を検討され、発掘調査地点（推定長岡京左京二条二坊五・六坪間）付近に存在し木簡等の遺物を投棄した官衙が太政官厨家であることを推定したものである。殊に氏の推定の最大

の根拠である筆蹟の検討は、木簡を積文の形で報告書によってしか見ることのできぬ者にとつては本来理解困難な点であるが、本誌では当該木簡を含め多数の木簡の図版をコロタイプで巻頭に掲げ理解の一助としている点が注目される。ところが一方、「第一部」の「一九七七年以前出土の木簡（一）」に於いては、木簡の実物にあたり従来の読みを変えておられる執筆者もおられその労を多とするものではあるが、当該木簡の図版と従来の読みとが掲げられていない点が惜しまれる。改善されることを望みたい。

各地方で刊行されている報告書では、予算等の關係の故か木簡の図版をコロタイプで掲載しているものは極く稀であり、今後彼様な木簡研究の精細化に伴い少なくとも木簡の図版をより精密なものに改繕して掲載されることが要求されてこよう。

なお、行論中木簡に「考所」と表記されている存在が太政官の考選を掌る太政官内部の臨時的所であることは、「延喜式」卷十一太政官考定条・「西宮記」卷五定考・「北山抄」卷七定考事等の記事から最早明かであろう。

一方鬼頭論文は、藤原宮跡第24次発掘調

査に於いて多数の出土をみた奴婢關係木簡についてその出土遺構・出土状況・記載内容を詳細に検討し、それらが官奴婢を管掌する官奴司で使用・投棄されたものであると想定し、更に奴婢論に及んで官奴司に直接隸屬する二つの類型の官奴婢、即ち今奴と常奴の区分がその居住地（「宮と村」）によるもので、永久的都城の成立と関わるものであることを推定しておられる。今奴と常奴の理解については全く逆の想定も可能かと思われるが、木簡の記載と正倉院文書との関連から展開された官奴婢論は今後話題を集めることであろう。

最後に一言。本誌の体裁・編集等については今後とも各方面から注文・助言が寄せられることであろうが、あくまで学会設立の目的を守りそれを果される様切に希望する次第である。

定 価 三、〇〇〇円（送料三〇〇円）
 申込先 〒630 奈良市二条町2丁目9番1号

奈良国立文化財研究所

田中稔氣付

木簡学会

振替口座 京都一五二七

(B5判 二二六頁 図版六丁 一九七九年十一月 木簡学会 三〇〇〇円)
(橋本義則 京都大学大学院生)

『ドイツにおける都市史研究の現状——組織・テーマ・方法——』

E・エンネン (立教大学国際学術交流報告書第一輯)

本書は一九七八年四月八日、立教大学国際学術交流資金による第一回のプロジェクトとして同大学で行なわれた国際学術交流に関する報告書である。近年、国際的な学術交流が様々な専門分野において活況を呈していることは周知のとおりであるが、これと外国史研究の領域に限れば、種々の障害のゆえに必ずしも充分な機会が与えられてきたとは言いがたい。こうした中で立教大学は従来より国際交流を重視し、また多大の成果を挙げってきたのだが、此度その成果を公にするための学術交流報告書の刊行資金が設けられるに至り、その第一輯としてとりあげられたのが、ドイツ中世都市研究の碩学エンネン教授を招いての学術交流に関

する報告である。この場をもつに際しての主な労をもとられた鶴川馨氏によって編集された本報告書には、エンネン教授の報告のみならず、これに続いて行なわれた討論もまた収められており、日独研究者の文字通りの交流が広く学界の財産として共有されることを可能にした点においてきわめて貴重なものである。

本報告書のタイトルとなったエンネン教授の報告については、既に『西洋史学』第一一〇号に魚住昌良氏による訳稿が掲載されているので、若干のコメントを記すに留めたい。教授の報告は積極的に自論を展開することよりも、学界の現状を適確に把握することに意を用いている。しかしこうした学界動向の展望からおのずと浮かびあがってくる現在の都市史研究の方向性は、エンネン教授自身の都市史研究の方法及び課題とほぼ一致していると言えよう。方向性と言うにはあまりに多様であるかもしれない。にも拘らず本報告において中世都市成立史に関する近年の研究動向として、古代から中世への都市の連続において教会組織の果たした役割及びこれと結合した在地的な手工業の存続の重視、プラーニッツ的ヴ

イク概念の批判、都市共同体形成における多様な要因の考察(フランクの参審員団体、フランスの平和運動及び南西ヨーロッパの宣誓共同体運動の影響)等々が指摘されるべき、それは同時にエンネン都市史学の基軸をなしてきた緩やかなひとつの方向性をも表現しているのである。これら他、都市概念の多様化、時期的、地域的な限定下でのその再構成の必要性、中世後期の都市の人口史的、社会的な問題への論及が興味深い。欲を言えば、都市とヘルンヤフ(Minderstadt) についても触れられるべきであった。

都市史研究者及び多くの西洋中世研究者をも含む参加者とエンネン教授の間で行なわれた質疑応答は多岐に亘っている。その中で教授は、複合的な基準 Kriterien-bündel によって都市概念を地域毎に規定する場合、具体的にはまず外観(フアン)、内部の社会経済的構造、中心的機能 Zentralität の三つを指標とすべきことを説いている。都市の中心的機能は歴史地理学、経済地理学の成果を容れ、都市史においても最近頃に重視されつつあるテーマであり、一